

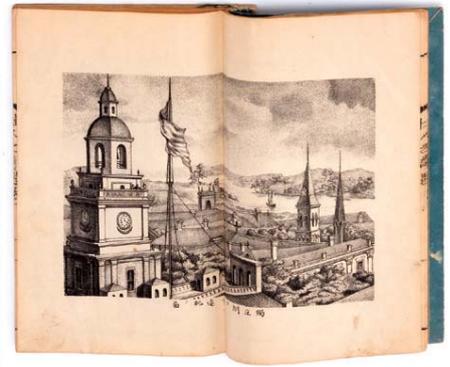
本の装い、百年

近代日本文学にみる装幀表現



会期:2013年11月22日(金)ー2014年1月19日(日)

会場:明治大学中央図書館ギャラリー



4 佳人之奇遇, 8編16巻
東海散士 著 柴四朗 1885 (明治18)
菊判、康熙綴じ、本文木版整版、挿画石版 (右図)

ごあいさつ

明治以来、欧米文化流入の波は、日本の書籍の形を大きく変えました。

和本の伝統的な印刷形態であった整版は活版印刷にとって代われ、それに伴い、さまざまな綴じの和装本は、現代に続く洋装本へと急速な変貌を遂げたのです。しかし、出版の近代化は、一方で、新たな装飾装幀の実験の場でもありました。和装本から洋装本への構造の変化、印刷術や用紙、クロスなど素材の開発、西洋の美意識やモードの流入、日本語文字デザインの確立と書体の多様化など、近代日本の書籍が経験したさまざまな変化の中から、今回は装飾装幀の愉しみについて考えます。

明治大学和泉図書館が所蔵する「日本近代文学文庫」から約90点の名装飾本を選び、3つの角度から書物装飾・装幀の展示を試みました。ちなみに「日本近代文学文庫」は、明治から昭和戦前期までの文学書の初版本を中心とした約3,700冊のコレクションです。最近では、文学史上重要な作家の戦後の作品も蒐集の対象とし、図書の函や帯なども含め、刊行された当時の姿で保存することに努めています。

この機会に近現代約100年にわたる「装幀表現」をお楽しみいただければ幸いです。

パートⅠ 近代文学作品と現代ルリユール [展示ケースA・B]

「日本近代文学文庫」収蔵の装飾本と東京製本倶楽部有志22人による現代ルリユール作品を並べて展示することで、近代と現代の嗜好の違いに見る装飾本の愉しみに焦点をあてます。

パートⅡ 明治から大正・昭和へ、装幀表現の変遷 [展示ケースC]

明治期は和装から洋装へ、西洋印刷術や製本術、書物素材などの変わりゆくさまをご覧ください。また大正・昭和までの装幀に特色ある作品を展示します。

パートⅢ 夏目漱石と泉鏡花の作品にみる装幀 [展示ケースD]

漱石と鏡花、この二人の作品は、装幀表現としても近代日本の装飾本の中で最も美しいものといえます。ここでは、橋口五葉や小村雪岱、鏑木清方といった明治期の名だたる装幀家、画家の手がけた主要な作品を展示します。

明治大学図書館

近代日本の本、その装いの変遷

岩切信一郎



書店に並ぶ本は様々な顔や表情をして、読者を誘います。何を讀もうかと本屋に入って、その表情の善し悪しで、あるいは内容で、買うか買わないか、(それは無意識でしょうが)決めることになります。この本の顔とも、広告とも受け取れる「装幀」は、出版上重要な意味を持っていて、その時代の雰囲気をもまっています。

今回の企画は、日本の近代に出版された文学書の約百年に焦点を当てて、その装幀(形体・デザインを含む)の推移、変遷を眺めてみようとの試みです。しかも、ここに並べた本はすべて明治大学図書館所蔵本から選んだものです。

並んでいる本たちの時代は、具体的には日本の本が西欧化した時代で、とくに製本上は、江戸時代の和綴じ(和装)本に対する、明治以降の洋綴じ(洋装)本の時代です。大量に出版される同一装幀の製本を「数物(かずもの)製本」と呼びます。また、これに対して特別に製本家に依頼して造ってもらい、世に一冊だけの、あるいは小部数の装幀・製本のことを「諸(もろ)製本」と称します——今回は東京製本倶楽部の方々が近代文芸書の名作に対応して現代ルリユール作品として制作された装幀作品も並びます。こうした両方の製本があったことは一般的には知られていません。そこで、大量出版のための製本装幀、あるいは、個別な味わいをもつ製本装幀の在り方も知って頂きたいと考えます。そしてこの企画展示から、様々な装幀表現があることや「本の美」ということへも関心を向けてほしいと思っています。

今や電子出版・電子書籍の時代になってきました。そうした中で、私たちはこれまでの「本」をどう捉え、どうイメージして来たのでしょうか。「本」というオブジェはもうこの形では限界なのでしょう。その振り返りのひとつとしても、かつての日本近代の、本が生き生きと輝いていた時代の百年に思いを馳せてくださればと思います。

和装本から洋装本へ 一合巻サイズから四六判へ

さて、洋装本の出発から見てみましょう。和装本(和紙・木版整版・和綴じ本)から活字の本の時代へ、そしてそれは、当時、海外から大量に輸入された語学教育用のテキスト体裁(板紙の厚表紙に背はりボンを貼り付けた簡易製本)を「洋装」と思いこんだものでした。現代からみると少々胡散臭い代物なのです。

製本の点では明治6年(1873)に、カナダ人のW・F・パターソンと言う人が本格的な革装の西洋製本術を教授し、製本と罫引術を教えています。和本師の中にも製本術を学ぶものもあって、官公庁や銀行関係の保存性の高い帳簿の製本、貴重書類の保存用装幀として重宝したのですが、この製本術は一般大衆にとって必要なものでは無かったのです。むしろ当初の出版としては活字で印刷された紙の束を如何にくるむかであり、西洋的な雰囲気をもった表紙であり、製本であれば良かったし、低コストが要点だったのでした。

時は、文明開化期に「日本での洋装本」は生まれたのでした。具体的には、明治10年(1877)前後の時期に試行錯誤の試験的取り組みがみられます。これが一般に普及するのは明治10年代の中頃(1881-85)から20年代(1887-96)にかけてとみられます。それは先ず、中身(本文)から変わります。それまでの木版整版(一枚の板木に文字や絵を彫師が彫って、その彫板に和紙を重ねてバレンでこすって摺り上げる)の文字から、活字(金属活字を組んで活版印刷機で印刷)へと変化しました。それは、表紙が江戸期以来の和の装い(錦絵摺り付け)で、めくった中身が活字で印刷された洋紙という和洋折衷の本でした。

さらに、外も内も真新しい本である「洋装」となりますと、これには二つの型(パターン)があって、明治16年(1883)から19年(1886)にかけて急速に普及するのが、板紙を使いハードカバーの体裁をまねた



10 歐洲小説 黃薔薇 〈表紙〉
和装本から洋装 (ボール表紙) 本へ
共に三遊亭圓朝口述、石原明倫筆記、金泉堂の出版で四六判、文字は活字。左図は和装本 (表紙木版多色摺で糸綴じ)、ただし奥付けを欠いている。右図は洋装ボール表紙本 (板紙使用、表紙は石版多色のクロモ石版)、1887(明治20)発行。

「ボール表紙本」であり、少し遅れて20年を越す辺りから普及するのがペーパーバックを思わせる「紙装本」(紙装仮製本のくるみ表紙)だったのです。

印刷は、活版機械を使って、油性インクが活躍する時代が来たのでした。本のサイズとして注目したいのは、これらが江戸の合巻のサイズを継承した四六判 (B6判に近い) サイズであることです。日本人の手の大きさを意識したサイズだったのでしょうか。本文は、片面一枚刷りの紙を二つ折りにした袋綴じから始まり、紙の両面刷りとなって、その頃には和本の特徴であった丁付けからいよいよ近代の特徴であるページ打ちに変わっていくのでした。



15 塙園右衛門 〈表紙〉
宮崎三昧 著 春陽堂 1893(明治26)
口絵: 渡邊省亭/久保田米傳
菊判、中綴じ、くるみ表紙、表紙 (木版多色摺)、本文活版、口絵多色摺り木版

菊判の普及 — 豪華な鏡花本と漱石本 —

菊判 (A5判に近い) は、江戸期の読本のサイズを踏襲して、小学校教科書とか雑誌のサイズに引き継がれた判型なのです。明治20年代中頃 (1890 ~ 1894) には文芸書単行本の判型として定着してきます。その傾向がより顕著となるのが明治28年 (1895) の『文芸倶楽部』(博文館) 創刊、翌年の『新小説』(春陽堂) 第2期刊行の頃でしょうか。こういった代表的文芸誌が登場した辺りの時期から大正初期までを明治期菊判の全盛期とみる見方もあります。

正確に言えば、明治後期の文芸書単行本出版では、四六判に加えて、この菊判も文芸書の主流として活躍します。当初の菊判単行本は雑誌の製本とあまり変わりのない仮綴じ (紙装) 本で、その表紙意匠はシックな装飾画に特徴があります。当初は彩色刷木版のくるみ表紙で仮綴じた上に、絹糸飾綴や打紐結び綴にした、実に優美な装幀となっています。さらにその表紙をめくると鮮やかな口絵が折り込んで挿入されています。

当時はこの口絵の出来栄えが出版の決め手とも言われ、文芸書に欠かせないものとして約20年ばかりの期間で、大正初めごろまで一時代を築きました。中にはコロタイプに着色というレアなもの、最新式印刷のカラー石版のもの、最も好評だったのが江戸錦絵の名残としての木版を駆使した鮮やかな色調の木版絵画でした。

また表紙材料として板紙にクロス (製本の外装用材料。Book cloth) が用いられ、菊判のクロス表紙の単行本として盛んに発行されるようになりました。もちろんそれだけでなく叢書として菊半



16 ひげ男 〈口絵〉
幸田露伴 著 博文館 1896(明治29) 口絵: 富岡永洗
菊判、結び綴じ、本文活版、挿画写真製版



18 黄櫨匂 〈口絵〉
尾崎紅葉 著 春陽堂 1898(明治31) 菊判、平綴じ (針金)、本文活版
口絵 (画家名不詳) コロタイプ+木版多色摺

截、三六判、三五判といった様々な判型での出版も盛んになったのです。

そうした時代の趣向に応じた判型の変化、本の体裁の変化変遷を一目瞭然にみせてくれるのが、一連の泉鏡花の著書群です。それは造本装幀の美しさの点でも優れており、その賛美をこめて「鏡花本」と呼ばれています。

さらに豪華さの点では「漱石本」と称される、夏目漱石の『吾輩八猫テアル』をはじめとする一連の漱石名著群が挙げられます。どこか荘重さを持つ菊判主流の出版に見どころがあって橋口五葉、津田青楓の装幀です。このころから装幀も意匠だけでなく本文の組み方、造本上の美しさも求められるようになります。個性的な意匠での装幀家が登場するのも明治後期から大正期にかけてのことです。鏡花ものでは鍋木清方、小村雪岱の優美な意匠が装幀に良い雰囲気醸し出しています。

四六判主流・本的美しさを求めて出版社競合時代

大正末から昭和初期に興った大衆文学の文芸書(時代物・探偵物など)もそのブームによって一時代を築き、趣味ある装幀となっています。しかし、昭和初期には一冊一円の格安本を大量に全集ものとして出版した「円本」時代があって、大衆化が進んだのです。世の中の動きには反動がつきものです。安価な大量出版だけが、出版の在り方ではないことに気がきます。装幀に配慮したとは思えないのが一連の円本で、すべてが一様の簡略な製本だったのです。

昭和初期から中頃にかけては、書かれた内容に即した本の装幀をもとめて出版各社が個性的な本のデザインで読者を誘引します。新潮社、中央公論社、白水社、改造社等の各出版社から、時代風俗を反映させた百花繚乱の装幀の数々をみることができます。まさに出版社競合の時代で、昭和のモダンな装幀では恩地孝四郎、川上澄生、阿部金剛、伊藤熹朔、安井曾太郎、小穴隆一、中川一政等の仕事ぶりが見られます。

そして、用紙統制・出版統制の戦時下の出版でも、工夫した造本装幀がみられます。戦後の昭和期にはカバー(ジャケット)重視の出版へとなっていきます。こうした本の装幀をとりあげてみて、本がそれぞれの時代を纏い、歴史を反映しているということも事実なのです。



54 友染集 (上図は見返し、下図は表紙)
泉鏡花 著 春陽堂 1919(大正8)
装幀:小村雪岱
三六判、布装、丸背、絹布表紙(木版多色摺)、見返し木版(上図)、背には革題簽にタイトル金箔押し、天金



21 吾輩八猫テアル・下編 (表紙)

夏目漱石 著 大倉書店
1907(明治40)
装幀:橋口五葉 挿画:浅井忠
菊判、角背、薄表紙(改装)、挿画は石版多色摺(クロモ)
挿画用紙/輸入紙含む手漉き紙3種
天金、表紙は厚手の鳥の子紙に題が凸版(朱)、猫図と円囲みが金箔押し。



27 妻 (左図は函、右図は表紙)
田山花袋 著 今古堂書店 1909(明治42) 口絵:橋本邦助
菊判、並製、表紙石版、タイトル箔押し、本文活版、カラー口絵(写真製版)



67 罌粟はなぜ紅い 〈表紙〉
宇野千代 著 中央公論社 1930(昭和5) 装幀:東郷青児
四六判、紙装、丸背、上製



69 世界選手 〈表紙〉
ポール・モオラン 著 飯島正 訳 白水社 1930(昭和5) 装幀/挿画:阿部金剛
菊判、紙装、丸背、上製、表紙・表紙下部に銀箔



74 秋の朝: 創作集 〈表紙〉
吉田絃二郎 著 改造社 1935(昭和10) 装幀:恩地孝四郎
四六判、紙装(木版多色摺)、角背、上製

本の文化

出版が盛んになるにつれて、蔵書に囲まれた書齋がつくられ、それは書齋文化を生み出しました。机には文鎮、ペーパーナイフ、タバコ、灰皿、インクにペン等が置かれました。主人の座る椅子の背後には書籍の詰まった本棚が並びました。こういう空間が好まれ、理想とする時代もありました。それは男性社会の反映でもあったわけです。これに対して、明治後期には女性雑誌(34年の『女学世界』、35年の『少女界』、39年の『少女世界』など)が急速に普及したのですが、女性が人前で雑誌を読み、本を読む姿は「生意気で、嫁にもらいがたい」等と言われる時代でもあったそうです。女性の読書趣味が世間的にも許されるのは大正になってからだとも聞きます。現代では本はどこでも自由に読めます。それだけに軽量で持ち運びに便利な本が好まれるようです。

それぞれの国ごとに本のサイズが違うように、「本」に対する文化も違います。日本のこの百数十年の在り方は、大衆化(出版部数拡張)と安価化(コスト低単価切りつめ)に力点が置かれたようです。出版社はいつの時代も「よい本を提供したい」と公言してきたのですが、この場合の「良い本」とは、本文の訴える思想内容ではあっても、製本装幀のことは無かったようです。堅牢な造本にして後世に残そうとする製本の上の配慮は薄かったように思われます。日本近代の本の弱点は製本が甘いことでもあります。それは既に明治期からですが、文芸書の多くは、角背でくすみ製本です。開きやすく堅牢な丸背の本は文芸書単行本にはあまり見られません。

今や押し寄せる電子メディアの時代の席捲に、本や雑誌は次第にその存在に陰りが見え始めているようです。悲しいかな「愛書家」とか、従来の紙束の本での「読書趣味」は次第に遠いモノとなって行くのでしょうか。

出版の大きな変革期の中で、改めて本の美しさに注目していただき、「装幀」への見識を新たにして頂ければと思います。

いわきり しんいちろう
(新渡戸文化短期大学教授)

工芸製本、ルリユール小史

文・東京製本倶楽部

ルリユール (reliure=フランス語で製本という意味) は、本文を綴じることから、表紙装飾、函の仕立てまで、一貫して手仕事で仕上げる、ヨーロッパ中世から続く工芸製本である。

15世紀半ば、グーテンベルグの活版印刷の発明以降、本は印刷の時代を迎える。初期の印刷本は、書体やレイアウトをはじめ、製本も綴じの支持体である背バンドや木製表紙を持つゴシック様式など写本時代の形を模したものであった。

印刷術のヨーロッパ各地への伝播に伴って増加していった書物は、当時主流であった河川交通を使い、運搬の利便性のため、多くは仮綴じ、未綴じの折丁の状態 で運ばれた。製本は現地の本屋や読者に任されていたので、印刷された同じテキストでも所有者、地域によってさまざまな製本が施されたのである。

ルネサンスの文芸復興期には古典テキストの収集研究、出版が行われ、それらは多くの知識人の交流により広がり、フランスではジャン・グロリエやドゥ・トゥのような愛書家も生まれた。ヴェネツィアの学匠印刷家アルド・マヌーツィオの工房では、今日に繋がるハンディな判型、活字をつくり、八折版など小型本の普及に貢献した。またビザンチン、イスラム世界からは金箔押し の技術が伝わり、表紙革につける模様や、小口装飾にも金が使われるようになった。製本では本文を糸で綴じる支持体に革や麻紐を用い、支持体を板紙など表紙に通し、接着して表装素材をかぶせる「綴じつけ製本」が装飾技法とともに完成されていった。

17、8世紀の製本は、王侯貴族を中心とする蔵書のために表紙や背に金箔押しの花型模様で豪華な装飾がある一方、市民社会での需要に応えるため画一的な簡単な装飾の製本も作られた。

18世紀末には、製本にも工程の省略化への工夫がみられ、半革装やホローバック、ブラデル製本などが生まれた。

19世紀、産業革命による製紙、製本の機械化などの技術革新により出版量は増大し、製本工程を早くするために、あらかじめ表装材でくるんだ表紙を別に制作した中身と組み立てる「くるみ製本」が生まれ、クロス装 (布装) や紙装の版元製本として発行されるようになった。この形は現在の「上製本」につながっている。

同時に、素材や内容、印刷にも凝った愛書家向けの工芸製本の展示会も開かれるようになり、多くの製本

作家が登場する契機となった。フランスのマリウス・ミシェル工房では、革モザイクと箔押しの技術を駆使しアール・ヌーボー装幀で製本した。イギリスでも中世を再評価する芸術運動の中、画家が装幀を担当し、活字や素材から研究して出版するウィリアム・モリスの活動があった。

中世からの装幀は、その時代の装飾様式に沿ったもので、テキストの内容と関連するものではなかった。しかし20世紀になると、製本装幀を本の内容への入り口として表現する試みが現れ、ポール・ボネやピエール・ルグランをはじめ、デザイナーと製本、箔押しの高度な技術を持つ職人との共同作業で多くの芸術作品が生み出された。

歴史的製本から現代の工芸製本まで、基本的な製本構造は「綴じつけ製本」である。しかし1980年代、ジャン・ド・ゴネが構造をデザインの一部として表現する製本をはじめたのを契機に、各地で古典技法の見直しや、様々な構造、形態の研究が活発になった。90年代半ばにカルメンチョ・アレジが支持体と表紙を一体化する交差式製本構造を発表し、他にも折丁に別紙をつけて開きをよくした、いわゆる「東洋風足つき製本」やソフトカバー製本など、本文に負担をかけない構造と装飾表現を共存させる様々な工夫がされている。また、「ブックアート」や美術家とのコラボレーションなど美しい書物の創造への探求も進行している。

明治時代、日本に西洋の製本技術が入ってきたのは機械化が進行する時期でもあり、工芸製本の技術は導入されず、1970年代に海外でその伝統技術を学んできた折久美子氏たち先達により紹介されたのが始まりである。

現在、産業としての手製本はほとんど残っていないが、製本工房や教室は世界各地に存在し、国際的な展示会やコンペティションも各地で開かれている。「もの」として本の形態を保存する補修の考えも広まり、製本技術の一翼を担っている。

東京製本倶楽部は、工芸製本の第一線で活躍する製本家を中心に、装幀家や出版人、コレクターなど工芸製本を愛する人々によって1999年に設立された。2000年の第一回展以来、「東京製本倶楽部展」はルリユール作品の発表の場であり、製本工芸の素材、歴史などテーマに沿って隔年で開催、国内外から多くの製本作家が参加している。また、和紙作家の団体や古書店との共催展などルリユールの魅力を紹介する展示会や講演会などを企画開催、近年は、工芸製本の技術史に関する研究や、製本ワークショップにも力を入れている。

東京製本倶楽部会員による 現代ルリユール作品

凡例：作品写真には、リスト番号／製本作家名／製本の様式／使用素材など／制作メモ／閉じた時のサイズ（mm）／ルリユール制作年／箔押、製函の外注がある場合のみ担当者を記す。

下段にルリユール作品のもとになった書名／著者／出版社／出版年／装幀者・挿画家など／装幀の特徴を記した。

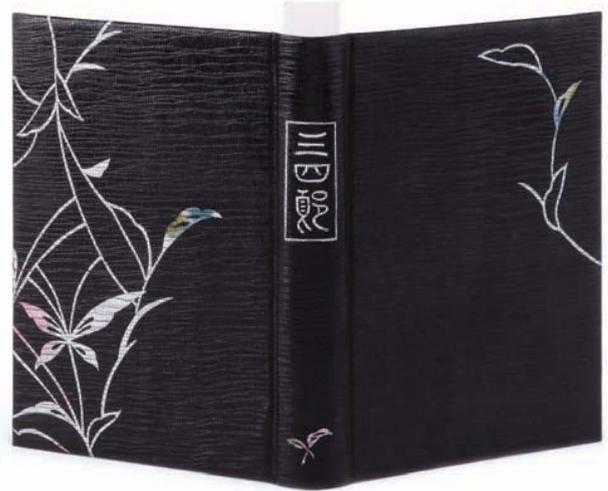
綴じつけ製本 本文を糸綴じするときに麻紐や革の支持体を用い、表紙ボードにその支持体を通して表紙と本文ブロックを一体化してから、革でくるんで表紙をつける製本方法で、堅牢な構造をもつ。

ブラテル製本 18世紀末に綴じつけ製本を簡略化して生まれた製本方法で、表紙と背芯を接着してから表装材でくるむ。背表紙と本体の間に空間のあるホローバックの構造をもち、本文の開きがよい。

くるみ製本 表紙をあらかじめ表装材でくるみ、別で作った本体と主に見返し紙で接着する製本方法。

足つき製本 各本文折丁に別紙で同じ厚みの足をつけ、その部分を綴じる製本方法。本文の開きがよく、足部分の作り方で、綴じつけ製本にも、和装本のような形にも仕立てることができる。

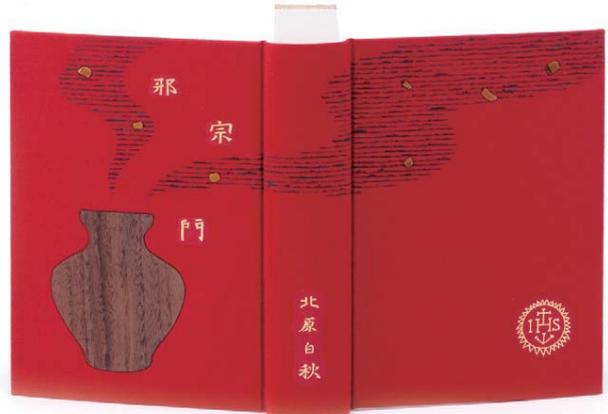
ブラ・ラポルテ製本 支持体を用いた糸綴じした本文に背表紙を接着してから表紙を後つける製本方法。平表紙の装飾を本体と別に作業ができる。



R03 鈴木敬子
くるみ製本 和紙、伊勢型紙の紙、紗、漆
もとの表紙は本文と見返しの間に綴ってあります。又、紗を漆で貼り、厚紙に折り込みやすくするためにできるだけ薄い型紙用紙を使用しました。
225×155 2013
三四郎 夏目漱石 著 精選名著複製全集近代文学館
日本近代文学館 ほるぷ出版 1980(昭和55)



R01 大越國憲
綴じつけ製本 姫路白なめし革(鹿)、絹糸
「姫路白なめし革」は扱いやすい製本に向いていると感じた。
190×140 2013
海潮音 上田敏 著 新選名著複製全集近代文学館
日本近代文学館 ほるぷ出版 1973(昭和48) 装幀：小寺健吉



R04 中野裕子
くるみ製本 布、突板、石
表紙にはウォールナット板と虎目石を埋込み、見返しはクロスモチーフとしたパターンを作成。異国情緒漂う幻想的な言葉の世界を表現。
191×142 2013
邪宗門 北原白秋 著 精選名著複製全集近代文学館
日本近代文学館 ほるぷ出版 1973(昭和48)
装幀：石井柏亭 挿画：石井柏亭/山本鼎 彫版：山本鼎 私信：太田正雄



R02 中尾エイコ
綴じつけ製本 山羊革、自作マーブルペーパーのプリント紙、漆、金箔
角背の本を綴じ直して、丸背の総草装に作り直しました 丸背に活字を押すのが一番苦労しました。
224×155 2013
草台 夏目漱石 著 復刻版 夏目漱石選集
春陽堂書店/ユーキャン 2005(平成17) 装幀：橋口五葉



R05 田口洋子 すみだ川
くるみ製本 カーフ革、モザイク部パーチメント、見返し和紙手染め
テキストの題字を、から押しふうに仕上げました。
195×139 2013
すみだ川 永井荷風 著 新選名著複製全集近代文学館
日本近代文学館 ほるぷ出版 1974(昭和49) 装幀：橋口五葉



R06 福田眞基

くるみ製本 和紙、木
 函の内側を本の見返しと同じ和紙にしました。
 110×155 2013 函：やと工芸(山田義男) 箔押し：中尾エイコ
 門 夏目漱石 著 新潮社 2012(平成24)



R09 柴田有子

くるみ製本 山羊革、手彩色紙、他
 初版本の復刻版を装幀。
 表紙・山羊革、見返し・手彩色紙。オンレイ・インレイ・箔押し 一部手彩色。
 「描くこと」を織り込み、表現に加えたかった。
 200×140 2013
 夜來の花 芥川龍之介 著 名著復刻芥川龍之介文学館
 日本近代文学館 ほるぶ出版 1977(昭和52)



R07 中尾あむ

くるみ製本 布
 表紙は裏打ちした布に、型染めで音符の模様を散らして染め、花布は手編み、本の小口にバラがけして色を付けました。
 189×135 2013
 小夜曲(せれなあと)：繪入詩集 竹久夢二 著
 ノーベル書房 1977(昭和52) 挿画：竹久夢二



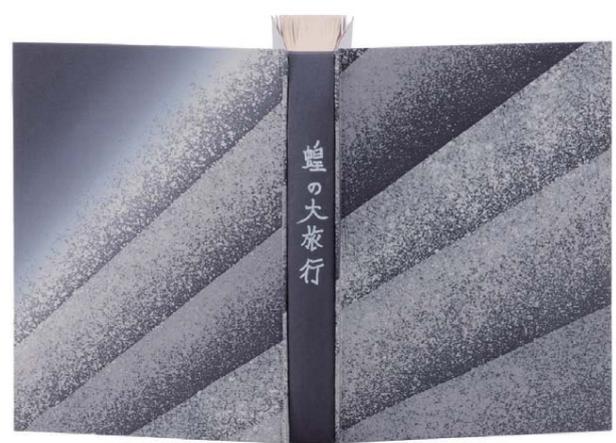
R10 井上淳子

綴じ付け製本山羊革等
 童話の楽しさを革のオンレイ、インレイ、箔押しで表現しました。
 188×13 2013
 注文の多い料理店 宮沢賢治 著
 新選名著復刻全集近代文学館
 日本近代文学館 ほるぶ出版 1982(昭和57) 装幀/挿画：菊池武雄



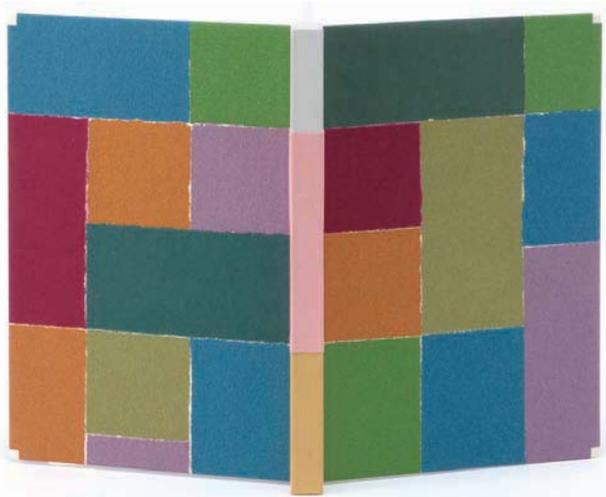
R08 藤田倫子

ブラデル製本 型染め木綿布(反応性染料使用)、和紙
 装飾としては、キリシタンの十字架からパターンを作り光が揺らめく影燈籠のイメージになるよう染色しました。タイトルも影燈籠の形の切り紙の和紙を嵌め込みました。
 177×130 2013
 影燈籠 芥川龍之介 著 春陽堂 1927(昭和2)



R11 田中葉月

足付き製本 絹、引き箔紙、レーヨン紙
 A La Japonaise(東洋風製本)の製本構造を变形し、画帖構造の足に折丁を綴じ付け、背を曲面にカットしています。表紙の布の染めは、ろう吹雪、染めの工程を繰り返して、淡色から濃色を重ねて染めました。
 223×193 2013
 螢の大旅行 佐藤春夫 著 名著復刻日本児童文学館
 ほるぶ出版 1971(昭和46) 装幀/扉画：富澤有為男 挿画：島田訥郎



R12 近藤理恵
平綴じ足付き製本 革、手染アルシュ紙
元本は雑誌付録の楽譜付き詩集、軽快な歌声をイメージして作りました。
222×159 2013
新しき春 西条八十 著 真文館 1928 (昭和3)



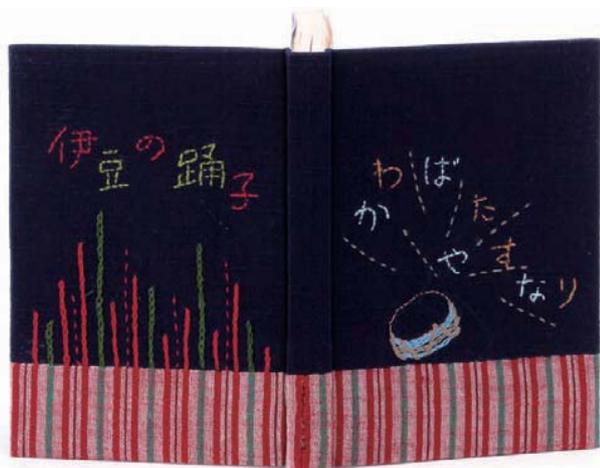
R15 中沢尚子
flexible-binding (フレックス製本)
絹織物(端切れ)、江戸千代紙、J.Hewit & Sons製紙(手刷り)
着物独特の重ね合わせの美しさを表現したいと、端切れを使用しレリーフのようなタッチを施す。
130×190 2013 函:中澤隆
春琴抄 谷崎潤一郎 著 精選名著複製全集近代文学館
日本近代文学館 ほるぷ出版 1973 (昭和48)



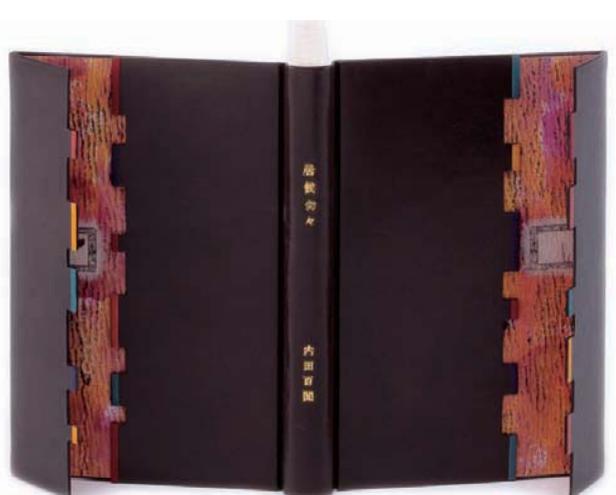
R13 羽田野麻吏
綴じ付け製本 パーチメント、仔牛革、駝鳥革
表紙、見返しだけでなく特選き本文紙にいたるまで、錫で構成されていた原本の印象を、異なる質感で表紙に用いました。
201×151 2013 箔押し:中村美奈子
地獄の季節 アルチュール・ランボオ 著/小林秀雄 訳 白水社
1930 (昭和5) 装幀:佐野繁次郎 王子製紙特選本文紙



R16 市田文子
綴じ付け製本 仔牛革、水牛革、蜥蜴革 黒仔牛革・二重装、水牛革見返し。
表紙に赤仔牛革モザイク・アンクリュステと、蜥蜴革のモザイクによる装飾
191×136 2013 箔押し:中村美奈子
詩人の使命 萩原朔太郎 著 第一書房 1937 (昭和12)



R14 川島久子
くるみ製本 古布のかすり
主人公が来ている着物に似たかすりをを用い太鼓が奏でる音を、かすりの色で動きを刺繍しました。
158×105 2013
伊豆の踊り子 川端康成 著 集英社 2008 (平成20)
カバー装画:荒木飛呂彦



R17 平まどか
くるみ製本 仔牛革
表紙の一部を開閉式にした。モザイクは、戦前の家の玄関扉や窓に使われることがあった色ガラスをイメージした。
174×120 2013
居候勿々 内田百閒 著 六興出版 1982 (昭和57) 装幀/挿画:谷中安規



R18 中島郁子
綴じ付け製本 山羊革、仔牛革、ヌバック
二重になっている表紙に静と動が感じられるように作りました
228×274 2003
馬來乙女の歌へる イヴァン・ゴル 著/堀口大學 訳
昭森社 限刊300部 1955 (昭和30) 挿画: アンリ・マチス



R21 西川順子
sewn board binding(表紙板綴じ込み製本) 紙、出雲和紙
175×255 2013
わが出雲・わが鑲魂 入沢康夫 著 思潮社 1968 (昭和43)
装画/装幀: 梶山俊夫



R19 藤井敬子
プラ・ラポルテ製本 白なめし牛革に手彩色、子牛革、山羊革、手彩色楮和紙
和紙のような質感の革に色をさし、レリーフ状の装飾をつける。
タイトルは金箔押し、連なった色が全体のポイントとなるようデザイン。
186×138 2013
采花集 與謝野寛 著 / 與謝野晶子 編 金尾文淵堂 1944 (昭和19)
装幀: 中澤弘光 (印刷: 堀井清/木版印刷: 西村熊吉/製本: 眞英社)



R22 國井ゆかり
綴じ付け製本 山羊革、和紙
モザイクには、手染めの山羊革をプラチナ箔で装飾したものを使用しています。
シュミーズ・スリップケース付
192×138 2011 箔押し: 中村美奈子
黒い雨/駅前旅館 井伏鱒二 著 新潮社 1969 (昭和44)
装画: 塩出英雄



R20 佐藤真紀
ライトステッチ 山羊革、三桎紙、麻糸
薄墨で描かれた挿絵の印象を壊さないよう、淡い色合いの革を使い、全体で夜空をイメージしました。
207×183 2013
星の童話集 (ふたごの星/よだかの星/鳥の北斗七星 所収) 宮沢賢治 著
童心社 1996 (平成8) 画: 浜田台児 表紙/扉レイアウト: 辻村益朗

ここに出品された22点のほとんどは、今回の展覧会のために新たに制作されたものです。明治大学日本近代文学文庫所蔵本の中から、ストーリーや挿画あるいは原裝から構想を得てデザインされ、革や布、和紙などの素材を使って手製本された、ルリユール（製本工芸）作品です。

ルリユールは、素材本を丁寧に解体し、様々な様式で折丁を綴じ直し、それを革や布、紙などによってデザインされた表紙と合体するまで、加工とプレスを繰り返す長い工程を経て出来上がります。簡単なものでも数週間、複雑なものでは数ヶ月、凝った装飾では1年以上を要するものもあります。

普段はあまり目にする事のないルリユールですが、本をつくるゆしみ、美しい書物を所有する喜びを共に味わう機会を作っていただいた明治大学図書館スタッフの方々および、ご観覧くださった多くの学生のみなさま、愛書家のみなさまに心から感謝しお礼申し上げます。

東京製本倶楽部 本の装い百年展実行委員一同

明治大学和泉図書館所蔵、日本近代文学文庫コレクションから

凡例：参考写真には、リスト番号／書名／著者／出版社／出版年／装幀者／挿画家／装幀の特徴を記した。(R番号) はルリユール作品と対応。



22 海潮音 〈表紙〉
上田敏 訳 本郷書院 1905(明治38) 装幀：小寺健吉 布装、角背、上製 (R01)



34 すみだ川 〈表紙〉
永井荷風 著 靱山書店 1911(明治44) 装幀：橋口五葉
紙装、角背、上製、背箔押し模様 (R05)



26 草舎 〈表紙〉
夏目漱石 著 春陽堂 1908(明治41) 装幀：橋口五葉
紙装、表紙木版/漆型引き、見返し石版印刷 (R02)



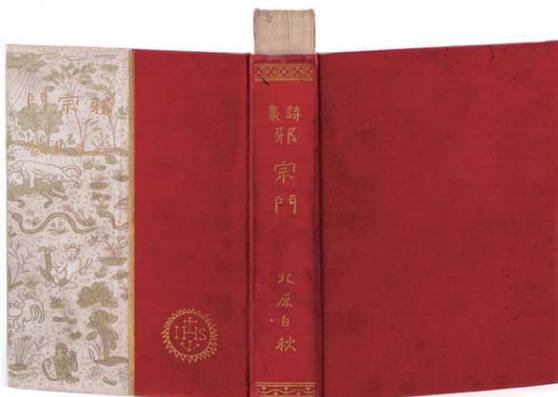
35 門 〈表紙〉
夏目漱石 著 春陽堂 1911(明治44) 装幀：橋口五葉
半布装、平・背箔押し模様 (R06)



28 三四郎 〈表紙〉
夏目漱石 著 春陽堂 1909(明治42) 装幀：橋口五葉
布装、雲母引き寒冷紗に凸版刷り、見返し石版印刷 (R03)



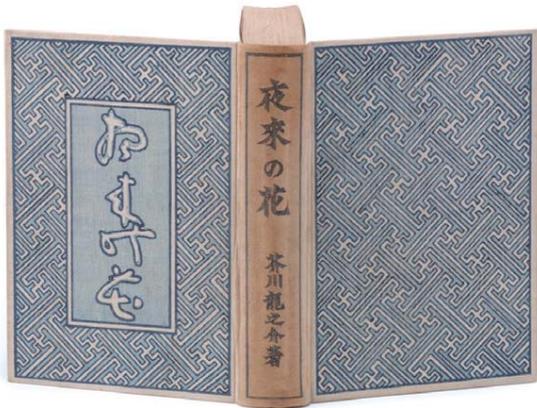
47 小夜曲(せれなあと)：繪入詩集 〈表紙〉
竹久夢二 著 新潮社 1915(大正4) 装幀：恩田孝 布装、角背、上製、天金 (R07)



29 邪宗門 〈表紙〉
北原白秋 著 易風社 1909(明治42) 装幀：石井柏亭 挿画：石井柏亭/山本鼎
彫版：山本鼎 布装(平は紙)、角背、上製、天金、二方未裁断 (R04)



57 影燈籠 〈表紙〉
芥川龍之介 著 春陽堂 1920(大正9) 装幀：野口巧造
紙装、丸背、上製、平は赤の模様紙に題箋 (R08)



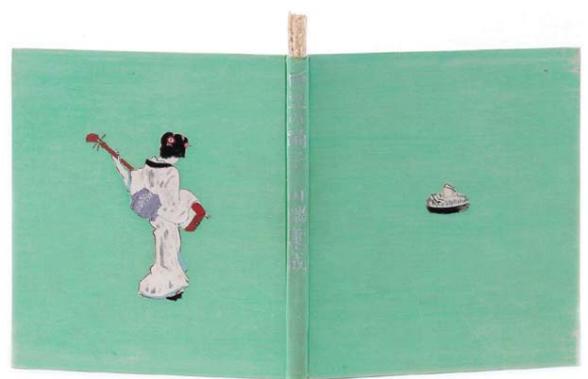
60 夜來の花 〈表紙〉
芥川龍之介 著 新潮社 1921(大正10) 書:小澤中兵衛 画:小穴隆一
布装、丸背、上製 (R09)



70 地獄の季節 〈表紙〉
アルチュール・ランボオ 作 小林秀雄 訳 白水社 1930(昭和5)
装幀:佐野繁次郎 紙装、丸背、上製 (R13)



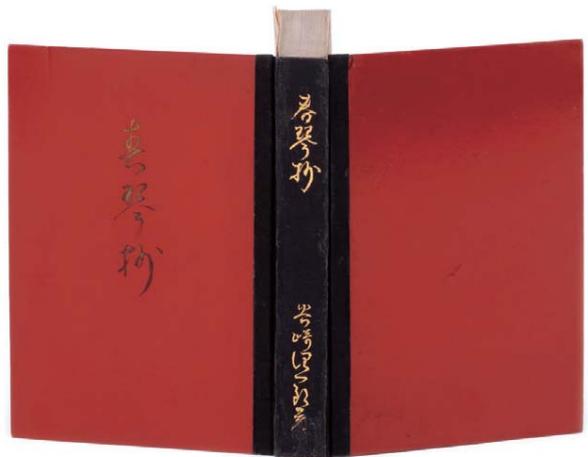
61 注文の多い料理店 〈表紙〉
宮沢賢治 著 近森善一出版 1924(大正13) 挿画:菊池武雄
紙装、角背、上製、表紙に図版の貼付け (R10)



71 伊豆の踊り子 〈表紙〉
川端康成 著 江川書房 1932(昭和7) 意匠:小穴隆一
木版:都筑徳三郎 紙装、丸背、上製、表紙・見返し木版画 (R14)



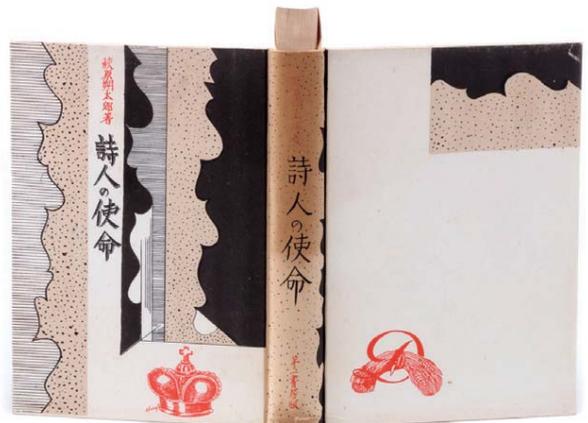
63 蛙の大旅行 〈表紙〉
佐藤春夫 著 改造社 1926(大正15) 装幀/扉画:富澤有為男 挿画:島田訥郎
布装、丸背、上製 (R11)



72 春琴抄 〈表紙〉
谷崎潤一郎 著 創元社 1933(昭和8) 装幀:谷崎潤一郎
口絵挿画:北野恒 布装(平は漆引き紙)、角背、上製、見返し揉み紙 (R15)



65 新しき春 〈表紙〉
西条八十 作歌 寶文館・令女界新年號附録 1928(昭和3)
布装(絹)、角背、結び綴じ、表紙に銀箔、紙題箋 (R12)



78 詩人の使命 〈表紙〉
萩原朔太郎 著 第一書房 1937(昭和12)
装幀:阿部金剛 紙装、丸背、上製 (R16)



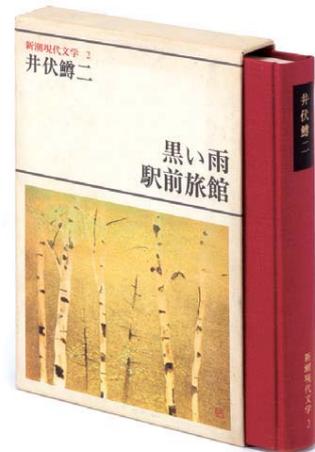
79 居候匂々 〈表紙〉
内田百閒 著 小山書店 1937(昭和12)
挿画:谷中安規 紙装、丸背、上製、つきつけ、平は模様刷、綴じ見返し (R17)



87 わが出雲わが鎮魂 〈表紙〉
入沢康夫 著 思潮社 1968(昭和43) 装画/装帧:梶山俊夫
紙装、角背、フランス装 R21)



80 馬來乙女の歌へる 〈表紙〉
イヴァン・ゴル 著 堀口大學 訳 驪人荘 1937(昭和12) 挿画:アンリ・マチス
布装、角背、上製 (R18)



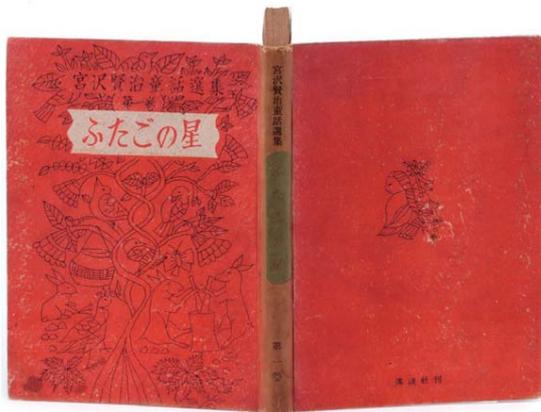
88 黒い雨 駅前旅館 〈函〉
井伏鱒二 著 新潮社 1979(昭和54) 装画:塩出英雄
布装、丸背、上製 (R22)



83 采花集 〈表紙〉
與謝野寛 著 與謝野晶子 編 金尾文淵堂 1941(昭和16) 装帧:中澤弘光
紙装、丸背薄表紙、表紙・見返し木版 (R19)



3 高橋阿傳夜刃譚 3編6巻 〈表紙〉
假名垣魯文 著 青盛堂 1879(明治12) 画:守川周重
四六判、四つ目綴じ、初編本文活字、2及び3編は本文木板整版、挿画多色摺り木版



86 ふたごの星 (宮沢賢治童話選集第1巻) 〈表紙〉
宮沢賢治 著 大日本雄弁会講談社 1948(昭和23) 装帧:寺田政明
挿画:川上四郎 紙装、丸背、上製 (R20)



左12 新磨妹と宵鏡 再版 〈表紙〉
坪内逍遙 著 鈴木金輔 1889(明治22) 挿画:松齋吟光 彫工:野口圓活
四六判、くるみ表紙、花布、表紙石版、本文活版
右14 二人女
尾崎紅葉 著 春陽堂 1892(明治25) 画:鈴木華邨/武内桂舟
菊判、結び綴じ、本文活版、表紙石版、口絵木版



左17 若菜集 〈表紙〉
島崎藤村 著 春陽堂 1897(明治30) 画:中村不折
四六判、本文活版、挿画写真製版右14
右19 田毎かみ 〈表紙〉
泉鏡花 著 春陽堂 1903(明治36) 画:錦木清方
布装、平綴じ(針金)、薄表紙 タイトル・模様部分箔押し



36 彼岸過迄 〈表紙〉
夏目漱石 著 春陽堂 1912(大正元) 装画:橋口五葉
紙装、角背、上製、表紙・口絵木版、見返しなし



20 風流線 〈挿画〉
泉鏡花 著 春陽堂 1904(明治37) 挿画:鯨崎英朋
半布装、丸背、上製



38 国貞画々 〈表紙〉
泉鏡花 著 春陽堂 1912(大正元) 装幀:橋口五葉
紙装、角背、上製、表紙・見返し木版



25 婦系圖 〈口絵〉
泉鏡花 著 春陽堂 1908(明治41) 口絵:錦木清方/鯨崎英朋
布装、丸背、上製、表紙色箔金箔型押し文様、見返し石版印刷



39 櫻草 〈表紙〉
泉鏡花 著 文藝書院 1913(大正2) 装幀:橋口五葉
紙装、角背、上製、表紙木版



30 四篇 〈表紙〉
夏目漱石 著 春陽堂 1910(明治43) 装画:橋口五葉
紙装、丸背、上製、表紙石版印刷



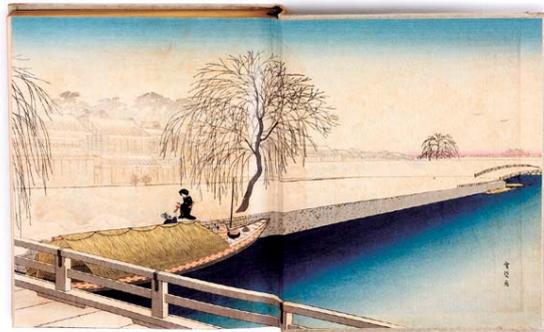
左から 51 明暗 31 吾輩ハ猫デアル 50 心 48 行人
46 彼岸過迄・四篇 42 三四郎 それから 門 すべて〈表紙〉
夏目漱石 著 袖珍本



44 日本橋 〈表紙〉
泉鏡花 著 千章館 1914(大正3) 装幀:小村雪岱
紙装、角背、上製、表紙・見返し木版



49 愛染集 〈見返し画〉
泉鏡花 著 千章館 1916(大正5) 装幀:小村雪岱
紙装、角背、上製、表紙・見返し木版、天金



52 鴛鴦帳:鏡花小史 〈見返し画〉
泉鏡花 著 止善堂 1918(大正7) 装幀:小村雪岱
紙装、角背、上製、表紙雲母引きに木版、見返し木版、天金



53 紅梅集 〈見返し画〉(小村雪岱と鍋木清方による)
泉鏡花 著 春陽堂 1918(大正7) 装幀:小村雪岱
布装、丸背、薄表紙、表紙木版(布刷り)一部金箔押し、背に革題簽にタイトル金箔押し、天金



左52 鴛鴦帳:鏡花小史 〈表紙〉



右53 紅梅集 〈表紙〉



64 構成派研究 〈表紙〉
村山知義 著 中央美術社 1926(大正15) 装幀:村山知義
紙装、角背、並製



73 奔琴菊 〈表紙〉
泉鏡花 著 昭和書房 1934(昭和9) 装幀:小村雪岱 刻:大倉藤太 摺:田口喜久松
口絵:尾崎紅葉 紙装、丸背、上製、表紙木版、見返し印刷、青の天染め



75 猫町 〈表紙〉
萩原朔太郎 著 版畫莊 1935(昭和10) 装幀:萩原朔太郎案 画:川上澄生
紙装、角背、上製(南京装)、小口色染め

第51回明治大学中央図書館ギャラリー企画展示
本の装い百年 近代日本文学にみる装幀表現

執筆:岩切信一郎 (新渡戸文化短期大学)
編集:明治大学中央図書館ギャラリー企画運営ワーキング
伊能秀明 鈴木秀子 宮澤順子 吉田千草
梅田順一 仲山加奈子 永田由香利 曾野正士
東京製本倶楽部(藤井敬子 近藤理恵 佐藤真紀 渡辺和雄)
デザイン:渡辺和雄 写真撮影:内藤サトル
発行:明治大学図書館(東京都千代田区神田駿河台1-1)
発行日:2013年11月22日